埼玉古墳群の構造変遷

関　義則

はじめに

埼玉県北部の行田市に所在する埼玉古墳群は、大宮台地北端の埼玉台地と仮称される独立した支台上に立地する大規模古墳群である。当時の地形によれば各古墳は西側に半円状に突出した台地端部の狭い範囲に密集して築造されており、前方後円墳は全て主軸方位を略南北に揃え整列的に配置されている。

このような古墳の配置構造となった最大の理由は、古墳の造営に際して古墳の正面を西側に向け、西側からの眺望性を最優先して古墳を占地するという築造規範が造営主体内部に共有され、古墳群の形成期間を通じて連綿と継承されたためと考える(関2012)。

埼玉古墳群は、こうした特徴的な築造規範を共有する一方で、築造された前方後円墳の規模には明確な格差が存在することから何らかの階層構造が古墳群内部に内包されていたと一般に理解されている。

埼玉古墳群の階層研究に先鞭をつけた増田逸朗氏は、埼玉古墳群の各古墳の規模をもとに100m級の大型前方後円墳、60m級の中型前方後円墳、20m級の円墳という3つの階層を想定した(増田1987)。また最近では城倉正祥氏が埴輪の分析から主系列と副系列の2つの系列を設定し(城倉2011b)、広瀬和雄氏も複数系譜型古墳群という概念を用いて埼玉古墳群を理解しようと試みている(広瀬2012)。そうした古墳群内部の階層構造と前稿で指摘した一系列的な古墳造営のあり方とはどのように整合的に説明できるのであろうか。

増田氏は前方後円墳を再整理して主軸方位の視点から3つの系列を抽出し、これらの系列を「宗主とそれを補佐する第2の権力者」という重層的権力構造を示すものと理解し、周辺の前方後円墳の方位に規制を及ぼしたものと捉え、埼玉政権論を唱える根拠とした(増田1991)。

しかしながら、埼玉古墳群の造営が先に述べたようなルールに従うものだとすると、少なくとも主軸方位の違いを被葬者の階層化や序列の有意な指標として認めることは難しい。古墳を造営する際に、先行する古墳の主軸線や周堀の側線等に縄張り上の基準を求めることは十分に考えられることであり、古墳相互の主軸方位に有機的な関連性が認められるとしても、それを視覚的な序列化の表現として帰結させるためにはなお多くの手続きが必要であろう。古墳群の内部構造に何らかの階層や序列が存在したとしても、少なくとも埼玉古墳群の造墓活動における主軸方位の決定に、古墳間相互の階層性や序列が作用しているとは思えない[1]。

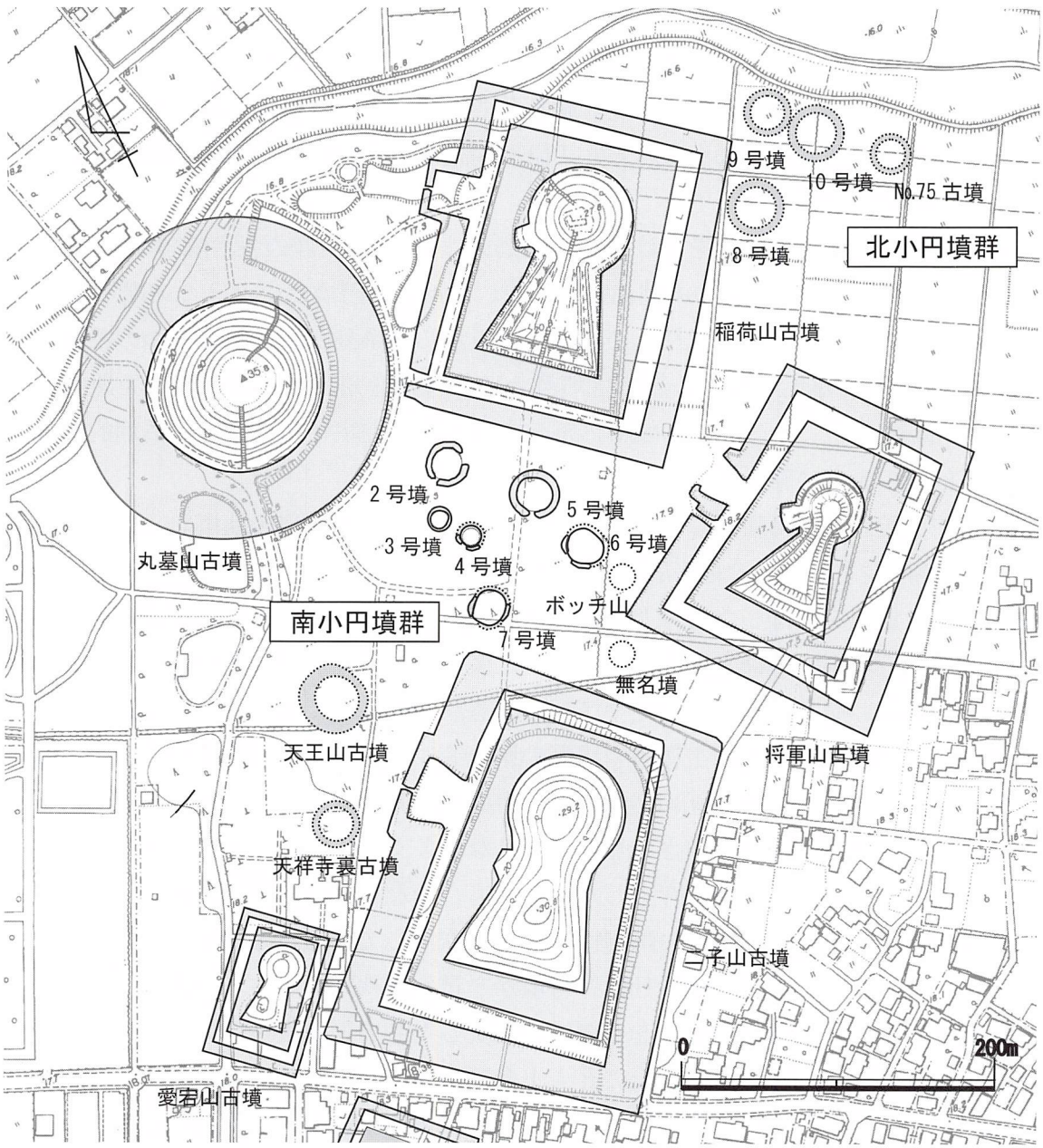
無論、前稿で示した古墳の築造系列は、古墳が一貫した秩序をもって築造されていることを示すものであっても、被葬者の立場をそのまま反映したものとは限らない。古墳の順列とは別に被葬者が複線的な系列を有していたことも十分に可能性がある。

本稿では、前稿で触れなかった小円墳との関係性、埋葬主体部の様相と古墳の時系列との関係等を整理し、埼玉古墳群の内部構造の問題に検討を加えることにしたい。

Ⅰ　小円墳群の位置づけ

1　古墳群中の小円墳群

埼玉古墳群は、およそ南北800m東西500mと推定される墓域内に11基の大型墳を中心として、いくつかの小古墳を含んで古墳群を構成していることが明らかになっている。小古墳のうち墳丘が残存する在名の古墳として、天王山古墳とボッチ山古墳、梅塚古墳(埼玉２号墳)の３基の古墳の存在が知られていた。ところが、1969年に「さきたま風土記の丘」の整備に伴い古墳群の空撮を実施したところ、この３古墳以外に稲荷山古墳と二子山古墳の間に６基、稲荷山古墳の後円部寄りの東側に４基の円墳の周堀跡が確認された。すなわち、遺構が地表の土壌等に影響を与え土壌の色に差が生じて遺構の形状を地表から模様として表出するソイルマーク(クロッ



第１図　埼玉古墳群内の小円墳群

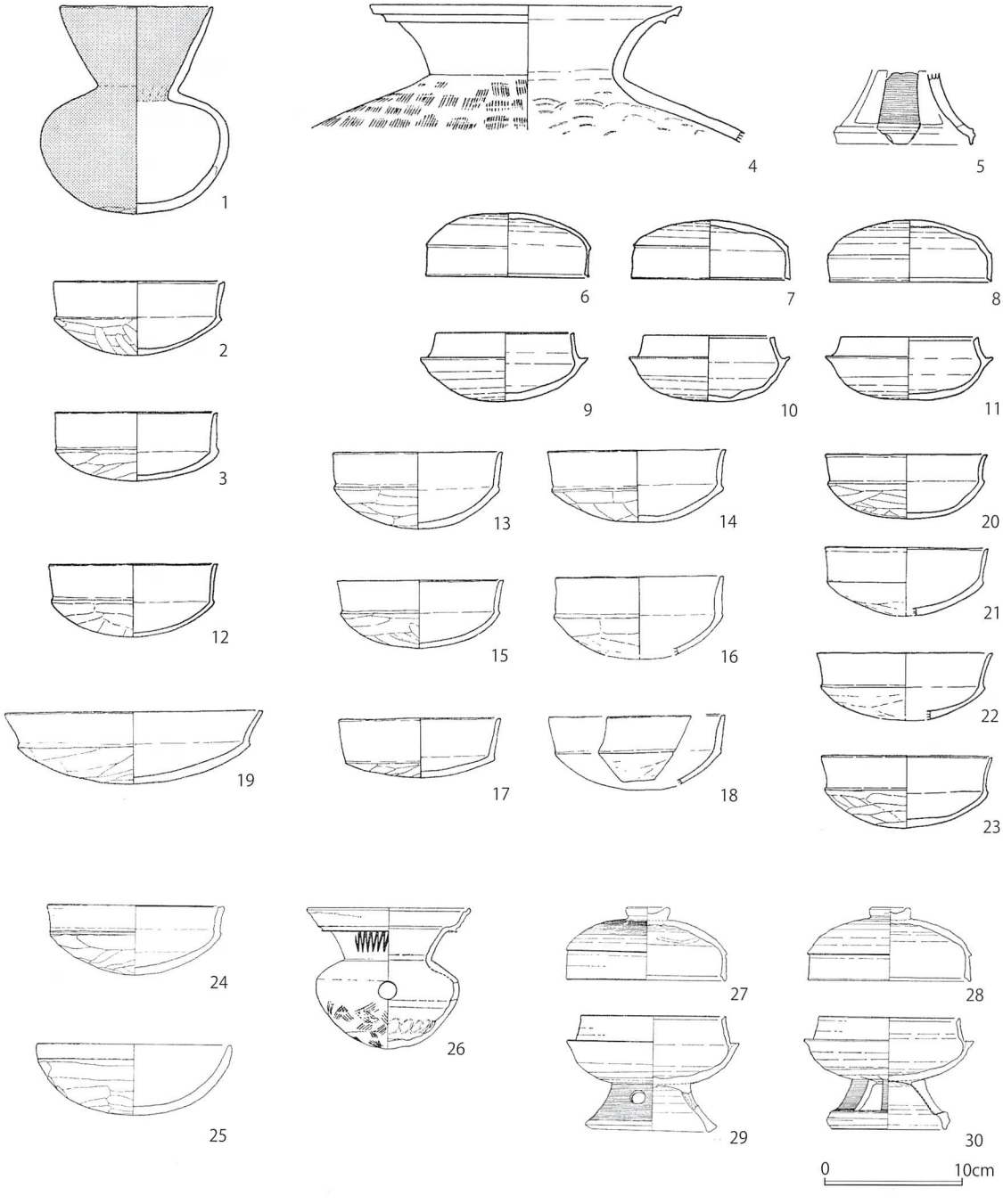
プマーク)として確認されたもので、このことによって大型墳の周囲に既に煙滅した古墳が多数存在していたことが判明した。ここでは前者を南小円墳群、後者を北小円墳群と仮称しておく。そのうち南小円墳群については1974年に発掘調査が実施されている(杉崎1988)。

調査の結果、それらのソイルマークはいずれも径20m～27m規模の円墳であることが明らかとなった。その他にボッチ山古墳の南側にも小円墳が1基存在したことが古地籍図から判明している。さらに1981年に天王山古墳の南側の地点で行田市教委が市道下に埋設されている排水路敷設工事に伴う発掘調査を実施した際に円形に巡る溝の一部が検出され、形象埴輪が多数出土したことからここに古墳の存在が明らかとなり、天祥寺裏古墳と命名された(斉藤1994)。天祥寺の寺域内にはそのほかにも小円墳が存在していた可能性もあるが、現在は建造物や墓地が所在するため確認はできない。従って、現在までのところ稲荷山古墳と二子山古墳の間で確認された南小円墳群は計10基ということになる。

このうち、後に述べるように時期がやや下がる第5号墳の陸橋部が他の古墳よりも南西に触れているほかは2号墳、4号墳、6号墳、7号墳とも同一方向の西側に向けて周堀を掘り残した陸橋を設置している。これらの陸橋は稲荷山古墳の前方部隅の陸橋とおおむね同一方向となっており、稲荷山古墳と二子山古墳の間の西側に開けた開放部に向いている。天王山古墳と天祥寺裏古墳は部分的な調査しか行われていないため、ボッチ山古墳とその南側の無名墳を含めてその詳細は不明である。

各古墳の年代は、TK47型式期相当の須恵器蓋・坏が出土した第2号墳(梅塚古墳)のほか、鬼高式土器の古い段階の土師器を伴うものがあり、いずれも稲荷山古墳～二子山古墳の築造前後

番号	名称	墳形規模	出土遺物	備考
1	天王山古墳(埼玉1号墳)	径27m、高1.2m	円筒埴輪、形象埴輪	
2	梅塚古墳(埼玉2号墳)	径23.5m	円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器、鉄製品	陸橋2か所
3	埼玉3号墳	径12.5m	円筒埴輪、形象埴輪、土師器	
4	埼玉4号墳	径17.5m	円筒埴輪、形象埴輪、土師器	陸橋1か所
5	埼玉5号墳	径26m	円筒埴輪、形象埴輪、土師器	陸橋1か所
6	埼玉6号墳	径22～22.5m	円筒埴輪、形象埴輪、土師器	陸橋1か所
7	埼玉7号墳	径21～22m	円筒埴輪、土師器	
8	ボッチ山古墳	径15～20m	不明	
9	無名墳	径15～20m	不明	
10	天祥寺裏古墳	径25m	円筒埴輪、形象埴輪	



1~11 埼玉第 2 号墳（梅塚）　12 埼玉第 3 号墳　13 ～ 18 埼玉第 4 号墳　19 埼玉第 5 号墳　20 ～ 22　埼玉第 6 号墳
23 埼玉第 7 号墳　24 ～ 30 埼玉稲荷山古墳

第 2 図　埼玉古墳群出土の土器

に形成されたものと考えられる。ただし、第 5 号墳出土の土師器はそれらよりやや時期が下がるもので 6 世紀でも中頃に位置づけられることから、時期的に後出する。この古墳のみ陸橋の方向が他の小円墳とずれており、時期差が遺構に反映されているとみられる。

調査された古墳は、天王山古墳とボッチ山古墳を除き完全に削平されており、主体部は痕跡も確認されなかった。しかしながら小古墳にはいずれも形象埴輪や円筒埴輪を伴い、周堀には

陸橋を有するものも多く、また陸橋の近くの周堀からは供献土器も検出されていることから判断して、副葬品埋納専用ではなく、埋葬主体を伴う古墳であると考えて良いであろう。

稲荷山古墳東北部付近で確認されたソイルマークは、2010年にその一部が確認調査され、第8・9・10号墳と命名された(佐藤2011)。10号墳の東隣には行田市№75号墳も所在し、計4基の古墳が判明している。その規模は推定で、第8号墳 25m、第9号墳 20～25m、第10号墳 25m、№75号墳 20～23mといずれも径20m～25m規模の円墳であり、南側小円墳群と大きな差は認められない。ただし、これら北側小円墳群については部分的な確認調査にとどまるもので遺物の出土が皆無であるため、時期等については保留せざるを得ない。

さて、ここまで小円墳と表記してきたが、天王山古墳、梅塚古墳、埼玉5号墳、天祥寺裏古墳は、それぞれ墳径が25m前後を有し、その他の古墳でも墳径は20m前後の規模となっており、後期の群集墳が10m程度のものも少なくないことを考慮すると南北両小古墳群ともに極端に規模が小さいというわけではない。ただこの古墳群内には円墳として径105mの丸墓山古墳、あるいは径40mと推定される浅間塚古墳が存在しており、前方後円墳やそれらの大型円墳と区別するために、ここではこれらを小円墳と呼称しておくことにする。

2　周辺の小円墳群

埼玉古墳群が所在する墓域以外にも周辺の台地や自然堤防上に埼玉古墳群の形成時期と並行する小円墳群が存在する。まず、埼玉古墳群の南西方向およそ0.5kmに位置する自然堤防上に佐間古墳群が所在する。行田市教育委員会によって1978年にそのうちの1基である大日塚古墳が調査されている(栗原他1978)。この古墳は、調査の結果によれば径22mほどの円墳と推定され、下層に緑泥片岩を組み合わせた箱式石棺とそれより上層に並列する2基の粘土郭の計3基の主体部が検出された。箱式石棺からは遺物が出土されなかったが、追葬された粘土郭からは直刀・鉄鏃・刀子・弓の飾金具等の副葬品が認められた。この古墳の築造時期は、出土した円筒埴輪の一部にB種ヨコハケが認められることから稲荷山古墳とほぼ同時期の5世紀末の年代が想定されている。また、1981年と1989年に開発に伴う発掘調査が行われ、佐間1～3号墳と命名された古墳跡が調査されている(中島1991)。いずれも部分的な調査であるが11m～15mほどの小円墳と推定され、1・2号墳から出土した土師器坏は、埼玉古墳群でTK47型式の須恵器坏と共伴している土師器と類似する法量・形態のもので、大日塚古墳の調査と併せ、佐間古墳群が稲荷山古墳や稲荷山古墳に隣接する小円墳群と同時期に形成されていることは確実である。

埼玉古墳群の東方およそ1kmの地点には愛宕通古墳群が所在する。径10mほどの小円墳群が確認されているが、第1号墳から出土した土師器坏は、梅塚古墳出土の坏に法量・形態ともに極めて近似するものでほぼ同時期の所産とみてよい(滝瀬1985)。

一方、埼玉古墳群北側の旧忍川の対岸にも古墳群が所在し、白山古墳群と呼ばれている。墳丘径50mほどの円墳である白山古墳を中心に10数基の古墳跡が確認されている。そのうち、№76号墳、№77号墳、№79号墳は、いずれも小円墳で旧忍川に平行するように占地しており、旧忍川が当時から存在した可能性を示すものである。小円墳群の時期は不詳であるが白山古墳及び白山2号墳は、6世紀後半から7世紀初頭頃の古墳と推定されている(中島他1994)[2]。

このように佐間古墳群や愛宕通古墳群の形成時期は、確実に5世紀末から6世紀初頭頃まで遡るものであり、埼玉古墳群中の小円墳群と時期的に重複している。従って、この地域においては、同一墓域内で大型墳と近接するように造営された小古墳群と、近傍ではあっても大型墳が立地する墓域とは異なる地点に造営された小古墳群の二者が併存していたという様相を確認することができる。

3　大型墳と小円墳との関係

埼玉古墳群内における小円墳の築造地点は、墓域の中でも北小円墳群・南小円墳群というように稲荷山古墳の東側と稲荷山古墳の南側で二子山古墳との間の2か所の空間に限定されており、古墳群全域に分布しているわけではない。少なくともこの台地端部では、それ以外の地点にはまったく小円墳は築造されていないのである。

また、小円墳は古墳群が継起した期間を通じて造営されていたわけではない。第5号墳のみはやや時期が降下し、さらに時期不詳の古墳もいくつか存在するものの、おおむね稲荷山古墳～二子山古墳・丸墓山古墳の形成時期と並行するとみてよい。従って、造営時期が一致し、近接する地点に造営されたこれらの小円墳群は、直接的にはそれらの大型墳と密接に関係を有する古墳と看做してよいであろう。

埼玉古墳群では、各大型墳は西側からの眺望性を最優先して、古墳の正面である造出しを西側に向けて造営されており、後出する古墳は先行する古墳を避けながら、極力眺望を確保するように選地するという原理が働いている。このような視点からみると、ここで取り上げた同一墓域上の小古墳群は、稲荷山古墳の東側と南側にのみ占地し、古墳の西側には立地していないことから、小古墳の選地に当たって稲荷山古墳の眺望性に対する配慮が存在したことは明らかであろう。一方、天王山古墳及び天祥寺裏古墳は、二子山古墳の西側に位置している。天祥寺裏古墳から出土した埴輪を検討した城倉正祥氏によれば、二子山古墳に先行する時期に位置づけられるという(城倉2011a)。従って、天祥寺裏古墳が二子山古墳の西側に位置しているのは二子山古墳への眺望を妨げるものではなく、古墳造営の時間的な前後関係に起因しているに過ぎないとみなせる。もし二子山古墳の築造地点が予め定められていたのであるとすれば、その直前に西側の地点に天祥寺裏古墳や天王山古墳を築造するような事態は避けたと推測されることから、二子山古墳の造営は少なくとも天祥寺裏古墳を築造以後に決定されたことを示しているとみるべきである。このような古墳配置は、大型墳の築造地点が早い段階から選定されていたという想定を否定するひとつの証となるものであり、また、こうした小古墳の配置から小円墳群は、上記の3古墳の中でも具体的に稲荷山古墳に随伴するものであることを明示していると考える。

さて、このような大型の前方後円墳に近接して造営された小円墳群の性格をどのように理解するべきであろうか。

大型墳によって形成される古墳群中でその大型墳を取り巻くように造営された小古墳については、一般に両者の関係は陪塚として理解されている。埼玉古墳群の場合においても従来から「大型古墳に葬られた埼玉古墳群の最高首長層を支えた小首長の墳墓」(杉崎1988)というような

階層的な関係で捉えられることが多い。また、白井久美子氏は、関東や九州において、盟主墳の周辺にブリッジを有する円墳が集中して存在することを明らかにし、そうしたブリッジ付き円墳は、旧来の規模を維持し副葬品にも飛躍が認められないことから、「中央と特殊な関係を結んでいた大規模前方後円墳の被葬者となったような地域首長を介して間接的に再編成された旧来の族長層」と評価している(白井1983)。白井氏の考えは、この時期に甲冑や馬具などの畿内との結びつきを強く示唆する副葬品をもちつつも規模の大きくない円墳が出現することを念頭に、小円墳に埋葬されるような族長層においても、直接的に畿内勢力と結び付いた階層と地域首長を介したそれの二者というような複線的な支配構造を想定したものであろう。

「最高首長層を支えた小首長の墳墓」にしても「地域首長を介して間接的に再編成された旧来の族長層」にしても、大首長と階層関係にある小首長という評価に違いは無いが、先に見たとおり埼玉古墳群周辺にも同時期の小円墳群が形成され、しかも佐間古墳群のように陸橋を有する小円墳が確認されていることから、これらを階層構造ととらえられるとしても、その内部にもさらに同一墓域に営まれる者とそうでない者といった格差が存在したことが窺える。

土生田純之氏は、前者のような大型墳に付随する小古墳について、大型墳が複数所在するような古墳群においては特定の大型墳に小古墳が付随する傾向が認められることから、同祖同族集団間の中に始祖墓を崇敬する観念が維持されていたことを想定している(土生田2010)[3]。若狭徹氏も保渡田古墳群では「二子山古墳の周囲のみ帆立貝形古墳・円墳・円筒棺・竪穴式小石郭からなる複層的な群集墳が付随」し、同時期のものを中心としつつも、6世紀後半のものまで含んでおり、「井出二子山古墳を強く意識して造営されたことはあきらかである」として、基本的に土生田氏の見解を支持している(若狭2010)。

保渡田古墳群では、帆立貝形前方後円墳や造出しを有する比較的規模の大きい円墳、小円墳など多様な規模と規格の古墳が取りまいており、これらを「ある種の地位や社会的立場」を同じくする集団ととらえられている。一方、埼玉古墳群では小古墳の規格は現在までのところ円墳に限られ、それほど複雑な構成ではなく、またその規模も20m～25mと、墳形および規模ともに格差は顕著ではない。しかしながら、形成時期が稲荷山古墳と重なるものが多いとしても第5号墳のように確実に時期が下る古墳を含んでいることは、保渡田古墳群などと共通する様相であり、埼玉古墳群の最初の大型墳である稲荷山古墳を強く意識していることは明らかである。始祖墓崇敬がこの古墳群においても認められるとしてよいであろう。ここでは、その性格についてはなお実証性には乏しいけれども、墓域外の小古墳との差異性を重視し、単に大首長に従属した小首長というだけでなく、こうした古墳の首長の性格を家政的な用務を担った小首長層と理解しておきたい。埼玉古墳群以外でも、大型前方後円墳には数基から十数基の小円墳を随伴するものが多く、群集墳のような数十から百を超えるような小円墳を随伴することはない。このような限られた数の小円墳の被葬者であって、しかも大型墳に深く関わる首長の性格については上記のように理解するほうが、適当で有るように思う。

問題は、埼玉古墳群の全形成期間を通じてこの墓域内に小円墳が形成されたわけではないということである。初期の段階では稲荷山古墳に随伴するように存在した小円墳群もTK10型式以降はこの台地上から姿を消してしまい、それ以降はこの墓域内に小円墳は造営されることは

なくなり、大型墳のみが造営される区域となる。各大型墳にそれぞれ小円墳が随伴する構造にはなっておらず、継続的に稲荷山古墳の周囲に小円墳が形成され続けるという様態でもない。このことは、同一墓域内に墳墓を形成した稲荷山古墳の被葬者集団と小円墳群の被葬者集団とによって示される埼玉古墳群内の階層構造になんらかの変化が生じたためではないかと推測される。

Ⅱ　大型墳の推移とその動向

次に埼玉古墳群を時系列で再度整理しておく[(4)]。埼玉古墳群の形成は、前稿で述べたとおり、二子山古墳と丸墓山古墳の間で先後関係が確定しない部分があるが、埴輪や須恵器を中心とした出土遺物の分析によって、おおよそ須恵器の型式に換算すると次のとおりの築造順であることが想定できる。

最初に稲荷山古墳(TK23～47型式期)の築造によってこの墓域のおける造墓が開始され、丸墓山古墳(TK47型式～MT15型式期古段階)、二子山古墳(MT15型式期段階)、瓦塚古墳(MT15型式新相～TK10型式期段階)、奥の山古墳(TK10型式新段階)、愛宕山古墳(TK10型式新段階前後)、将軍山古墳(TK43型式期古相)、鉄砲山古墳(TK43型式期)、中の山古墳(TK209型式期古段階)、浅間塚古墳と戸場口山古墳(TK209型式期中段階以降)の順で築造されたものとみられる。データは希薄であるが浅間塚古墳が円墳と推定され、一方で戸場口山古墳が方墳であることを考慮すれば、前者が後者に先行するものであることが予想される。立地的にも前者のほうが後者よりも西側に位置していることは重要な指標である。

埼玉古墳群では、その初期の段階で稲荷山古墳・丸墓山古墳・二子山古墳という120m～138mの大型前方後円墳や径105mの超大型円墳がTK23～MT15型式期段階にかけて相次いで造営された後に、やや規模を減じた瓦塚古墳の造営を挟んで、TK10型式新段階頃から再び奥の山古墳・愛宕山古墳・将軍山古墳・鉄砲山古墳という53m～109mと規模に格差を有する前方後円墳群がTK43型式期にかけて連続的に造営されている。

古墳相互の時間的懸隔は須恵器等の遺物に想定される時間幅に依拠するほかはないが、このうち最近の調査成果から特に注目するべき点は奥の山古墳と鉄砲山古墳の位置関係である。

TK10(新)型式新段階の奥の山古墳とTK43型式期の鉄砲山古墳は南北に並んで立地しているが、両者は周堀が交錯するほど近接している。前稿で触れたとおり奥の山古墳の前方部はこの台地端部に位置しており、台地上に立地させようとする限りこれ以上南側に寄せて築造することは不可能であった。従って、後出の鉄砲山古墳が奥の山古墳を避けて築造されていなければならないが、実際には調査の結果、両古墳ともに周堀が交錯しないように配されていた。つまり、鉄砲山古墳では、側面側が後円部と前方部隅で計測すると墳裾から外堀外側までの幅が32m～34mほどあるのに対して、前方部前面中央付近では20m強ほどに幅を減じている。その一方で、奥の山古墳においても、外堀の幅が側面では幅８m程であるのに対して鉄砲山古墳と向き合う後円部前面では幅３m程度と狭めている。また、確認調査によって両古墳ともに周堀と中堤の傾きがともに西側に行くほど矩形に斜行させている状況が確認された。鉄砲山古墳の西側側面や後円部西側の様相が未だ十分に調査されていない状況では断定は避けなければならない

が、向かい合う周堀と中堤をみるかぎり両古墳が周堀や中堤の幅を相互に調整することで交錯を避ける配慮が働いていることが認められるとしてよいであろう[5]。このように後出する鉄砲山古墳のみならず先行する奥の山古墳にも築造上で一定の配慮が働いていることは、少なくとも奥の山古墳の造営が完了しないうちに鉄砲山古墳の縄張りが検討されたことを示している、つまり縄張りも含め造営期間が重複している時期が存在したと考えるほかはない。

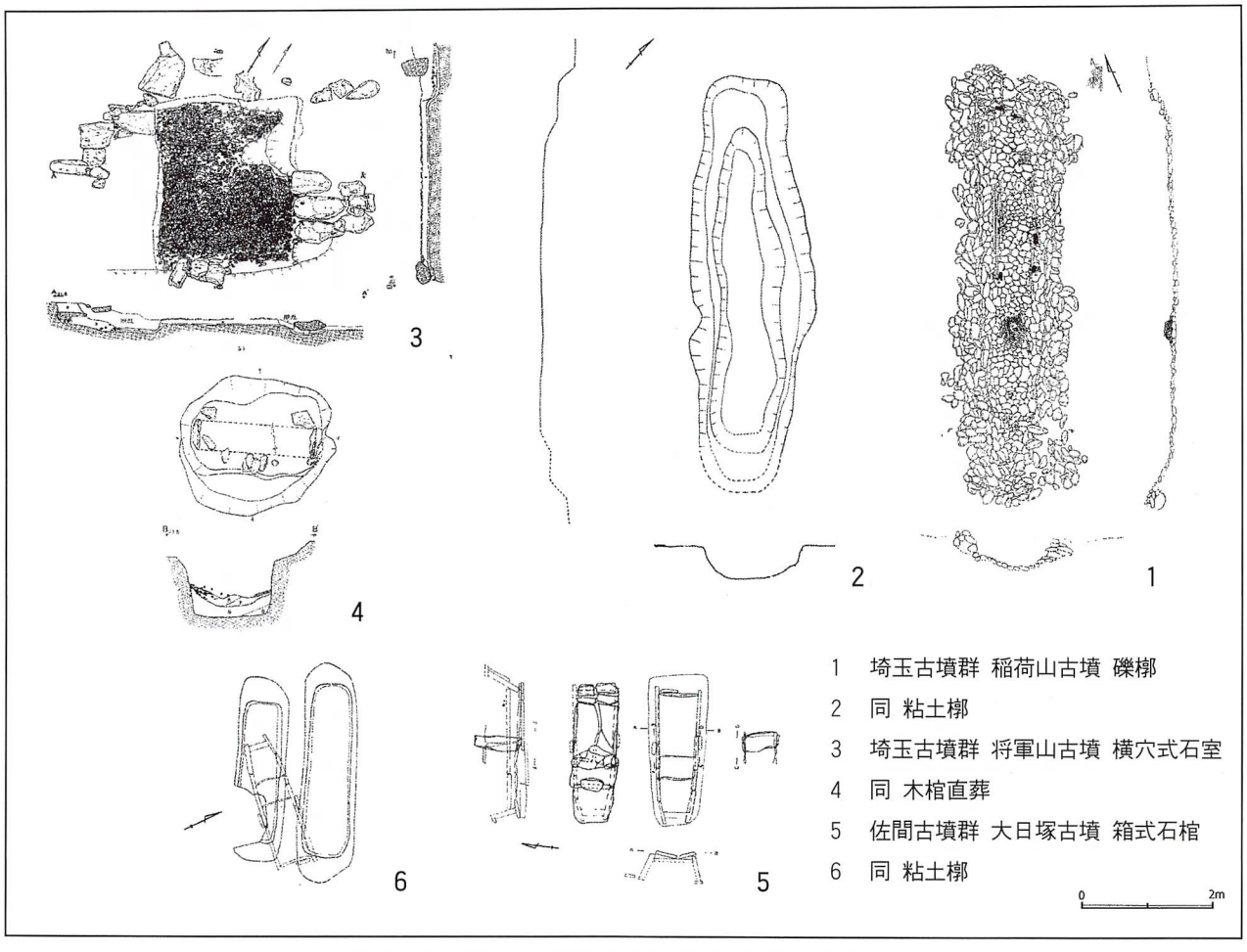
埼玉古墳群では長く見積もっても一世紀半程度の間に11基もの大型墳が造営されており、早くから大型墳の築造間隔が短いことが注意されているが、必ずしもその間隔は一様ではない。ここで述べたように、奥の山古墳と鉄砲山古墳の築造が重複する可能性がある上に、埴輪や須恵器から見る限り両古墳の造営の間に更に将軍山古墳が築造されていることは疑いない。また、同時期には愛宕山古墳も造営されたとみられる。このように、奥の山古墳・将軍山古墳・鉄砲山古墳・愛宕山古墳の4基の前方後円墳は極めて近接した時間幅の中で時期を重複させながら造営されていることが見てとれる。その後は前方後円墳が終焉し、浅間山古墳・戸場口山古墳がTK209(中)から(新)にかけて造営されているように再び造営する古墳数を減じて終息に向かうようである。

このように連続して造営されることで形成された埼玉古墳群も時間的に均等に造営されているわけではなく、TK43型式期前後に前方後円墳がとりわけ集中して築造されている様相が窺える。また、この時期には愛宕山古墳や奥の山古墳といった埼玉古墳群中で比較的規模の小さい前方後円墳が造営されているのもひとつの特徴として指摘できる。このことは、古墳の築造順においては厳然とした順列を維持しながらも、50m～60m級といった規模に格差のある前方後円墳がこの古墳群中において新たに出現しこの古墳群の築造秩序に組み込まれながら造営されるようになったことを示しているといえる。

Ⅲ　埼玉古墳群の主体部

1　主体部の概要

次に埼玉古墳群における主体部の状況を簡単に整理しておく。埼玉古墳群の大型墳の中で埋葬主体部が明確に判明している古墳は、稲荷山古墳と将軍山古墳の2古墳しか存在しない。稲荷山古墳については、1968年の風土記の丘整備に伴う学術調査において後円部墳頂から礫槨と粘土槨(木棺直葬)の2つの主体部が検出されている。また、将軍山古墳では明治年間に付近の住民が石材獲得のために私掘したところ後円部で横穴式石室が開口し、多くの遺物が出土した。それらの遺物は今日では東京国立博物館、東京大学総合資料館、本庄市歴史民俗資料館、そして当館の4施設に分散して収蔵されている[6]。その後、平成3年度から県立さきたま資料館(現さきたま史跡の博物館)によって史跡整備に伴う発掘調査が実施され、半壊された横穴式石室の詳細な状況が判明するとともに新たに前方部から木棺直葬が1基検出された。これが埼玉古墳群で情報として確認できる埋葬主体部の全てであり、内部主体や副葬品に関するデータの欠如は、埼玉古墳群解明の大きな支障となっている。しかしながら、最近のレーダー探査や墳丘裾部分の確認調査等によって、主体部がある程度推測できる事例が増加してきたことから、不十分ながらも大型墳における埋葬主体部の様相が明らかになりつつある。以下、データが少ない



第3図　埼玉古墳群及び周辺の古墳の主体部

のを承知の上で、埼玉古墳群の埋葬主体部について整理しておく。

(1) 稲荷山古墳の主体部

稲荷山古墳の2基の主体部のうち報告書で第1主体部としたものは、一方が尖頭状の舟形に河原石を積んだ全長6.5m、最大幅1.9mほどの礫槨内に木棺を納めたもので、大型石材の入手が困難であったこの地域の特色を良く示している。調査報告によれば、礫槨内で確認された遺物の上部にはほとんど礫が見当たらなかった。すなわち、木棺の下部から両脇かけて0.5mほど舟底状に礫を積み上げたものの上部に礫を用いて完全に棺を被覆する構造ではなく、礫槨というよりも礫床に近い構造である。形状が舟形であることと関連するものと考える。なお、調査時の所見では礫槨上面には木炭が堆積していたことが記録されており、上面は礫の替わりに木炭で被覆していた可能性もあるが詳細は不明である。

一方、第2主体部とした粘土槨も、盗掘によって改変されているが長方形を呈し、推定全長6.5m、最大幅1.9mと礫槨とほぼ同寸である。内部には極めて僅かな粘土しか検出されなかったことが報告されており、棺全体を被覆するような粘土槨とは異なり、要所に粘土塊を詰めただけの木棺直葬に近い形態のものである。しかしながら、本稿では混乱を避けるために報告書の記載に従う。一般に稲荷山古墳で認められた礫郭や粘土槨(木棺直葬)は、在地色の強い主体部

と評価されている。

1968年の調査では主体部の公開を前提とした学術調査であったため、最初に確認した2基の主体部のさらに下層は調査が及んでいないが、この2基の埋葬主体部の位置が古墳の主軸線から外れていることから、中心部分の深い場所に第3主体部を想定する見解が有力視されている(白石1985)。1982年と1998年の2回にわたり実施された後円部のレーダー探査では、中心部分に主軸と平行する別の3基の主体部が存在する可能性が指摘されている(小川2003)。また、昭和初期の前方部の土取りの際に、石組みや鉄刀が出土したという伝承も残っており、前方部にも主体部が存在した可能性が大きい。こうした情報を総合すると、稲荷山古墳には少なくとも6基もの埋葬主体部が存在したことになる。

ところで、1997年に実施された稲荷山古墳の周堀の調査において、後円部側の外堀立ち上がり部下場から1.2m×1mの大型の緑泥片岩の板材を含む80数点の石材が出土している(若松他2007)。報告書によれば、石材の出土位置は堀の下場で、遺構に密着している状態であったことから後世の混入ではなく古墳造営時の遺物と判断されている[7]。これらは黒色片岩や緑泥片岩を中心に砂岩や凝灰岩をわずかに含むものであり、いずれも荒川水系の石材であることが確認されている。調査者はこれらの石材を主体部構築に関わる石材の一部と推定しており、葺石など他にまったく石材を使用していない古墳であることから、妥当な見解であると考える。発掘調査された礫槨及び粘土槨では、緑泥片岩等の片岩系の石材は一切使用されていないことから、これら大型の片岩を含む石材片は、未見の主体部構築に関わる石材である可能性が大きく、またその主体部は石材から判断して大型の板状の石材を用いた箱式石棺である可能性が大きいと考える。

(2) 奥の山古墳の埋葬主体部

稲荷山古墳に継続する二子山古墳や丸墓山古墳、瓦塚古墳など6世紀前半代の古墳の主体部は現在までのところ不明である。二子山古墳では、主体部は未調査であるものの後円部中央付近に径約10m、深さ1mほどの巨大な穴が開いており、この盗掘穴によって後円部の中心主体部はほぼ完全に破壊されているものと推測される。

6世紀中頃に造営された奥の山古墳は、築造時期から判断して横穴式石室と想定されたこともあった。しかしながら、2009年に実施したレーダー探査の結果、後円部墳頂に2m×0.5mほどの長方形の箱状の埋葬施設が2基確認された。それらは深度も主軸方位も異なるが、その状態から奥の山古墳の主体部は箱式石棺である可能性が高いことが指摘されている[8]。このように奥の山古墳においても、稲荷山古墳と同様に上下に重複するように複数の主体部が構築されていることが窺えるのである。

(3) 将軍山古墳の横穴式石室

将軍山古墳は、羨道は失われていたものの僅かに残った根石と石の抜き取りの痕跡から、玄室長3.2m、玄室幅2.0m、羨道幅1.0mほどの矩形の右片袖の横穴式石室であることが判明している(岡本1997)。石室床面は二段築成の一段目と二段目の境となる中段テラスと同じレベルであ

り、非常に高い位置に構築されている。残存していた側壁の根石から側壁には未加工のいわゆる房州石と呼ばれる淡灰色の凝灰岩質砂岩を使用して構築されていたことが判明している。房州石は，房総半島西部から切り出された凝灰質の砂岩～細礫岩石材の総称で、採石場は富津市から鋸南町にかけて点在し、その地名をとって、元名石(鋸南町元名)、金谷石(富津市金谷)、天神山石(富津市海良)、高宕石(富津市高宕山)などと呼ばれ、すこしずつ石質が異なっている。将軍山古墳の根石には表面に穿孔貝による穿孔痕が残されている。こうした特徴を有する岩石は、富津市金谷付近の海岸に散在する転石(磯石)と一致することから、この付近の海岸が供給地と推定されている(高橋・本間1991)。なお、側壁の間隙の充填材には、三波川結晶片岩類や秩父水系のチャート・砂岩系の河原石を使用しており、それらは利根川や荒川の河川敷から採取してきたものである。また、現在は失われているが天井石も秩父産の緑泥片岩系の石材と推測されている(岡本1997)。

(4) 鉄砲山古墳の石室石材

将軍山古墳の直後に造営されたと推定される鉄砲山古墳では、2011年に行われた整備に伴う確認調査の結果、後円部東側括れ部寄りの3区第4トレンチから、角閃石安山岩と緑泥片岩の破砕片が大量に出土した[9](佐藤他2011)。これらの石片はトレンチに限られ、他のトレンチからはまったく検出されていない。角閃石安山岩は、利根川中流域における6世紀後半以降の横穴式石室の主体的に使用された石室構築材であり、同様の事例として、同じ行田市内の酒巻古墳群において石室の前庭部分に石室構築材の破片が大量に遺棄されていたことが確認されている[10]。従ってこれらの石材も、この古墳の主体部の石室構築材の残滓とみて間違いないであろう。またこのことからトレンチの延長上に主体部の前庭部が位置していることが推測される。2012年に実施したレーダー探査では、3区第4トレンチから後円部中心に向かって上下2段の石列状の反応が確認されており、羨道部の石組の可能性が指摘されていることとトレンチ調査における所見は符合する[11]。さらに、このトレンチ内の墳裾に位置する地点から大型の土師器高坏群が伏せた上体で並べて検出されている。これらの点から、鉄砲山古墳後円部の主体部は角閃石安山岩と緑泥片岩を用いて構築された横穴式石室であり、将軍山古墳の後円部の主体部と同様に、鉄砲山古墳においても南向きに開口することが想定される。

(5) 戸場口山古墳の石室石材

戸場口山古墳は、今日では完全に削平されて宅地となっており墳丘はまったく残存していないが、1918年の土取りの際に巨石を用いた主体部が検出されてことが記録されている。付近には方形に加工された凝灰質砂岩が現存しており、この石材を根拠に、戸場口山古墳の主体部は天井石に緑泥片岩の巨石を用いた切石切組積の横穴式石室と推定されている(駒宮1989)。

ここまで取り上げた以外の古墳では、中の山古墳がかつて唐櫃山古墳と呼称された時期があったことが伝承されている。中の山古墳の墳丘上部は大きく削平されており、主体部が露出していた可能性もあり、6世紀末～7世紀初頭と推定される古墳の造営時期を考慮すると唐櫃は横穴式石室を示したものであった可能性もある。

2　埋葬主体部の系譜

(1) 横穴式石室導入以前の様相

利根川中流域における古墳時代中期後半以降の古墳主体部の様相はどうであろうか[12]。竪穴系主体部の調査事例は決して多くはないが、中でも稲荷山古墳と類似する礫槨と粘土槨が共伴する主体部を有する古墳として、現在の利根川左岸に位置する大泉町古海原前1号墳がある(橋本ほか1984)。全長53mの帆立貝形の前方後円墳の墳丘上からは粘土槨3基と礫槨1基が検出されている。古墳の築造時期は5世紀末～6世紀初頭頃と想定され稲荷山古墳とおおむね同時期とみてよい。このような一古墳多数埋葬事例は特に希少例というわけではないが、主体部が上下に重複して構築されていることと異なる構造の主体部が共伴する点は稲荷山古墳と共通する特徴である[13]。奥の山古墳においても、レーダー探査結果によれば深度と方位の異なる複数の主体部が推定されている。

しかし、同じ利根川左岸の太田市塚廻り古墳群では、礫槨や木棺直葬も存在するが、小割した板石を立てて組み合わせた竪穴式石槨(箱式石棺状内部主体)が認められる(石塚他1980)。

また、利根川右岸に位置する行田市大稲荷1号墳は、地元の本法寺に現存する緑泥片岩の石材が古墳の主体部と伝えられており、竪穴系の石室と推定されている(塩野2004)。大日塚古墳や塚廻り古墳群を参考にすれば、大稲荷1号墳の主体部も側壁や蓋材に複数の板材を組み合わされた竪穴式石槨であった可能性が大きい。一方、大稲荷2号墳はかなり主体部が破壊されていたものの残る礫の状態から礫槨と推定されており、ここでも多様な様相を示している(栗原他1974)。大稲荷1号墳で出土した須恵器瑳はTK23型式に比定され、同2号墳出土の鉄製楕円形鏡板付轡もTK23～TK47型式期に相当するものであることから(関他1988)、両古墳ともに稲荷山古墳に近接する時期の古墳とみてよいであろう。

同じ利根川右岸の酒巻古墳群は、数次にわたる調査の結果20基以上の円墳が確認され、6世紀の第1四半期頃に造営が開始され6世紀末まで継続的に造営されている小円墳を中心とした群集墳であることが判明している。古墳の大半は盛土部分が削平されていたが、横穴式石室導入以前の主体部としては、酒巻10号墳のように木棺直葬や礫槨を主体部としている(斎藤ほか1987)。

このように利根川中流域における小規模古墳の主体部には、同一古墳群や同一古墳においても竪穴式石槨と呼ばれる箱式石棺状の内部主体、木棺直葬、粘土郭、礫槨などの多様な主体部が採用されている。

ここで取り上げた古墳は、古海原前1号墳を別にすれば、いずれも規模の小さい古墳である。このように小型墳の埋葬主体部がある程度判明しているのに対して、大型墳は調査事例に乏しく主体部の状況は未だ明確とは言い難い。

奥の山古墳とほぼ同時期と考えられる羽生市永明寺古墳では、緑泥片岩の板石が墳頂部に現存する社殿周囲の土留めとして転用されており、社殿構築の際に主体部が撹乱されて石材が取り出されたものと推測される[14]。調査当時の遺物の出土記録によれば、遺物は板石の上部から発見されたとされており、このことから永明寺古墳の主体部は報告にあるような礫槨ではなく箱式石棺の可能性が大きい。この板石は、極めて大型であり側面や上面を長方形の一枚石で構

築している可能性が高く、小割りした板石を使用し底石の無いことの多い竪穴状石槨とは形状が異なるもので、おそらく奥の山古墳のレーダー探査で確認された2基の主体部も永明寺古墳の主体部と同様のものであろう。数少ない事例ではあるが、奥の山古墳や永明寺古墳の断片的な情報から類推すると、群馬県西部地域のような舟形石棺を採用しない利根川中流域の地域では、横穴式石室導入期以前には総じて大型墳の埋葬主体部として長持型石棺の系譜を引く緑泥片岩製の大型の板石を使用した箱式石棺が用いられたものと考えられる。埼玉稲荷山古墳で、周堀に遺棄された石材から中心施設のひとつが箱式石棺と推定されることもこのことを裏付けるものである(15)。

また、古墳には一般に墳丘中心主体部と別に墳丘裾や周辺の埴輪棺など多数埋葬する事例も認められるが、この地域では古海原前1号墳や稲荷山古墳のように墳丘中心部分に上下に重複して多数の埋葬施設をもつ一古墳多数埋葬の特徴が窺える。さらに追葬された主体部の副葬品は初葬の副葬品と見劣りしないかそれを凌駕する傾向すら窺える。たとえば、古海原前1号墳で出土した江田船山古墳出土と同型の画文帯神獣鏡は第3主体部に伴うものであり、稲荷山古墳では築造契機となった中心埋葬施設ではない追葬の礫槨に有銘鉄剣を含む豪華な副葬品を伴っていた。もうひとつの追葬である粘土槨は盗掘によって大半の遺物が失われていたが断片的な資料から礫槨と遜色ない馬具が副葬されていたことがわかる。先の佐間古墳群の大日塚古墳でも初葬時の箱式石棺では副葬品は皆無であったが追葬の粘土槨には弓矢や刀剣などの武器が副葬されていた。そもそも、主体部が上下に重複するのは追葬時の埋葬主体部についても古墳の中心に構築しようとする意識が強く働いたものと考えることができる。

こうした点からみると、上下に重複する一古墳多数埋葬を単なる近親者の追葬とみなすことは適当ではないであろう。このような状況は、一族内で遜色ない有力者が次々に同一古墳に埋葬されるというような状況を想定させるものであり、ある種の共同墓地的な性格がこの地域におけるこの時期の古墳ではなお強かったことを窺わせる(16)。

(2) 横穴式石室の導入とその経緯

埼玉古墳群では将軍山古墳の段階に初めて横穴式石室が採用された。この古墳の石室の石材は、房総半島に産するいわゆる房州石であり、貝の穿孔痕が明瞭な海岸沿いに分布するいわゆる磯石が使用されていたことは先に述べたとおりである。将軍山古墳の石室を検討した岡本健一氏は、こうした石室は畿内の初期横穴式石室と類似するものの関東地方では類例が少なく直接的な系譜を求めることは困難であると述べている(岡本1997)。

しかしながら、石材とそれを用いた石室構築工人との間に不可分な関係が存在するとすれば、石材の流通が石室の系譜に一定の方向性を示すものであることは疑いない。将軍山古墳の石室は、側壁の間隙の充填材に利根川や荒川の河川敷から採取してきた三波川結晶片岩類や秩父水系のチャート・砂岩系の河原石を用い、また天井石も秩父産の緑泥片岩を使用するなど、在地の石材も確実に使用されてはいる。しかしながら、石室の構築法や構造を決定する側壁に磯石が使用されていることからみて、この石材が石室系譜の大きな鍵を握っていると考えてよいであろう。

磯石の採集地である富津市周辺では、内裏塚古墳群を中心に5世紀代の竪穴式石室の構築材の段階からいずれも身近な石材である磯石を用いて石室を構築している。この地域における初期の横穴式石室の導入時期はTK43段階頃と考えられている[17]。初期の磯石を使用した横穴式石室である富津市内裏塚古墳群中の九条塚古墳の石室は、狭長で側辺が直線的な石室構造を呈している。このような石室全長が10mを超えるような長大で狭長な無袖型石室は、既往の竪穴式石室の構築技術上に受容された石室ととらえられており、こうした石室は、将軍山古墳の矩形の片袖式石室とは構造的な隔たりが大きく、石材は共通するものの直接的な技術的関連性は認め難い[18]。

一方、富津付近で採取できる磯石を使用した石室は、東京都葛飾区や板橋区の古墳群、さらには市川市に所在する古墳など東京湾の最奥部に比較的密に分布している。たとえば、葛飾区の柴又八幡神社古墳は径20m程度の円墳であるが、全長3m、幅1m程度の規模の小さい横穴式石室を主体部としている(谷口榮1992)。また、板橋区赤羽台古墳群においても第3号墳、第4号墳の2古墳ではいずれも加工しない磯石を使用して3m～4m程度の規模の小さい横穴式石室を構築していた(永峰1987)。市川市の法皇塚古墳もかなり石室が崩壊していたものの規模の小さい片袖の横穴式石室であることが判明している(小林他1976)。

こうしてみると将軍山古墳の石室は、石材の系譜こそ房総半島の富津周辺に求められるものの、石室構築技術的な面からみれば東京湾岸で旧利根川河口域の古墳との親縁性が強いことが窺える。埼玉古墳群周辺のように横穴式石室導入以前に竪穴式石室を採用せずに箱式石棺や礫槨・粘土槨・木棺直葬のような主体部を構築していた地域では、横穴式石室の導入にあたって専門的な工人集団の存在なしには石室の構築が技術的に困難であったことは想像に難くない。無論、埼玉将軍山古墳の石材調達をみると、在地の石材についても知見が無かったわけではないことは明らかである。また、行田市内の酒巻21号墳では、将軍山古墳出土と同型の須恵器瑞が出土しており、将軍山古墳とほぼ同時期と推定されている古墳であるが、横穴式石室床面には角閃石安山岩の小礫を敷き詰めていたことが確認されていることから(中島他1994)、微妙な時期であるが角閃石安山岩が使用できた可能性も残されている。それにもかかわらず遠方の磯石を搬入して使用している理由は、東京湾岸で石室構築に携わっていた工人集団が招来されて見知らぬ土地で初めて作業を行うにあたり経験知の中にある慣れた石材を使用したためと考えるのが妥当であろう。

将軍山古墳の直後に築造されたと考えられる鉄砲山古墳では、先に述べたように群馬県榛名山を給源とする角閃石安山岩の軽石と荒川水系の緑泥片岩を石室石材として使用していたと推測される。

角閃石安山岩を使用した石室石材の規格を検討した若松良一氏は、角閃石安山岩が分布する河川でも下流の古墳ほど石材規模が小さくなることを明らかにし、石材の採取は古墳近傍の河畔で行われるのが基本であったとしつつ、栢間天王山塚古墳では下流域に位置するにもかかわらず大型の石材を使用していることから、石材調達に際して大型墳に特別な配慮があったことを推測している(若松1982)。鉄砲山古墳の石室は未詳であるが、栢間天王山塚古墳と古墳規模が遜色ない大型墳であることを考慮すれば、この古墳の石室も石材の調達に特別の配慮がなさ

れた大型の石材を使用している可能性が大きいと推測できる。

3　埼玉古墳群と首長間ネットワーク

埼玉古墳群およびその周辺では、横穴式石室導入以前には礫槨・木棺直葬・粘土槨・箱式石棺などの埋葬主体部が存在した。木棺＋礫槨と木棺直葬は群馬県西部地域の礫郭＋石棺と石棺直葬に対応し、石棺を木棺に置換したものと考えられ、石材入手が困難な地域であった利根川中流域の古墳に採用されたものと推測される。しかしながら、群馬県西部地域と異なり、木棺＋礫槨が木棺直葬と階層的な秩序をもって採用されている様子は読み取れない。むしろ、永明寺古墳の状況などから箱式石棺が序列的には上位に位置するようであり、なお調査が十分でないものの、埼玉古墳群中の大型墳では稲荷山古墳や奥の山古墳の推測を踏まえ、箱式石棺から横穴式石室へという大まかな変遷が想定できそうである。主体部の状況が全て判明しているわけではないが100m級の大型前方後円墳と50m～60m級の中規模の前方後円墳において主体部の構造や使用石材による格差は明確ではない。

6世紀後半の段階に至って、将軍山古墳の主体部として初めて横穴式石室を採用した際に、おそらく東京湾岸で古墳の石室構築に多用されていた房総半島で産する磯石を導入したが、その直後に構築された鉄砲山古墳の横穴式石室では、群馬県の利根川中流域に濃密に分布している角閃石安山岩を用いている。同一古墳群で時間的に極めて近接して造営され、主体部の位置も後円部括れ部寄りという特徴的な場所に位置を共有する将軍山古墳と鉄砲山古墳において、まったく異なる石材と石材の構築法が採用されていると推測される点は重要である。このことは、榛名山の噴火時期という時間的な要因も関係する可能性があるものの石室構築技術を考慮すると石材の存否というだけの問題には収まらないであろう。

角閃石安山岩を使用した石室の石材加工技術が同一技術上にあるという宮田裕起江氏の指摘を受けて、梅沢重昭氏は上毛野地域を中心に「角閃石安山岩転石石材」を独占的に使用した専業的な石工集団が存在し、その影響下に下流域に同種の石室が拡大したことを想定している(梅沢1999)。特定石材を加工して組み上げるという石室の構築技術とその共通性及び分布域からみて、石室構築に特定の集団が従事したとする想定は妥当であると考える。

そして、先に述べたように将軍山古墳の石室も特定の工人集団の招来を想定できることから、将軍山古墳と鉄砲山古墳において同一の工人集団が極めて近接した時間の中で異なった石材・構築技術を用いて両古墳の石室を構築したと考えるよりも、両古墳では古墳の主体部の構築に際して互いに異なった工人集団を動員した結果と考えるほうが自然であろう。さらにこのような専用工人集団が特に墳墓の造営に関わるという性格上、地域首長と無関係には存在しえず、首長の管掌下にあったとすれば、その動員に当たっては複数いた工人集団を任意に採用する選択枝が存在したと考えるよりも、首長間で機能していたネットワークが異なっていたと考えたほうが理解しやすい。つまり、将軍山古墳と鉄砲山古墳の両古墳では、古墳の石室構築に際して異なった首長間ネットワークが機能していたということになる[19]。このような石室構築工人集団の起用に窺えるネットワークの違いは、とりもなおさず、古墳群の造墓システムをパッケージとして保有しておらず、古墳造営は個別の首長(あるいは造墓主体)の立場に依拠するもの

であったことを示しており、被葬者あるいは造墓者の一定の自立性を示唆するものといえる。将軍山古墳では後円部に墳丘造出しを設けるという稲荷山古墳・奥の山古墳と同企画を採用しているのに対して、鉄砲山古墳では二子山古墳・瓦塚古墳と同企画で前方部側面に造出しを設けるというように、時期的に近接しつつも墳丘企画の点においても異なった設計が採用されていることもそのことを裏打ちする。古墳に樹立した埴輪についても、生出塚埴輪窯という同一生産集団からほぼ一元的に供給を受けていることは共通するものの、将軍山古墳では墳丘上での円筒埴輪の樹立間隔が広く樹立総数が減少傾向にあるが、それよりも後出する鉄砲山古墳では埴輪を樹立させる最終末の古墳にも関わらず墳丘上の円筒埴輪は相互に密接するほど密に樹立させているなど、その供給の在り方は両者で大きく異なっている。

埼玉古墳群では、方形二重堀の統一的な採用や同一方向に古墳の正面を向けるといった強固な共通性を保持しつつも、墳丘企画や埴輪樹立や主体部の様相など細部については今見たように個性が認められる。

このことは、伝統的な墳墓企画と築造規範の遵守に窺える強固な同族結合意識を共有しつつも、被葬者である首長はその活動において必ずしも一元的なネットワークに縛られない独自性を有していたと理解されるのである。

Ⅳ　さきたま周辺の古墳動向

先にみたように、埼玉古墳群ではTK43型式期前後に前方後円墳がとりわけ集中して築造されている様相が窺える。こうした状況が生じた原因として、社会変動や首長構造の変質とは別に、この時期に古墳に埋葬されるべき首長の死去が偶発的に重なったものに過ぎないという見方も当然ありうるであろう。あるいは単に埼玉古墳群内部の個別的な事情なのか周辺部をも含む普遍性をもつものなのかといった問題もある。そこで次に埼玉古墳群の周辺の大型墳の動向について瞥見する。

行田市周辺には古墳時代後期になって真名板高山古墳、若王子古墳、小見真観寺古墳など埼玉古墳群以外にも100m級の大型前方後円墳が集中して造営されており[20]、その様相については、既に多くの先行研究がある。(増田1982、杉崎1992、坂本1996、塩野2004)。特に最近では太田博之氏が簡潔に整理を行っている(太田2007)。そうした研究を参考にしつつ改めて整理してみよう。

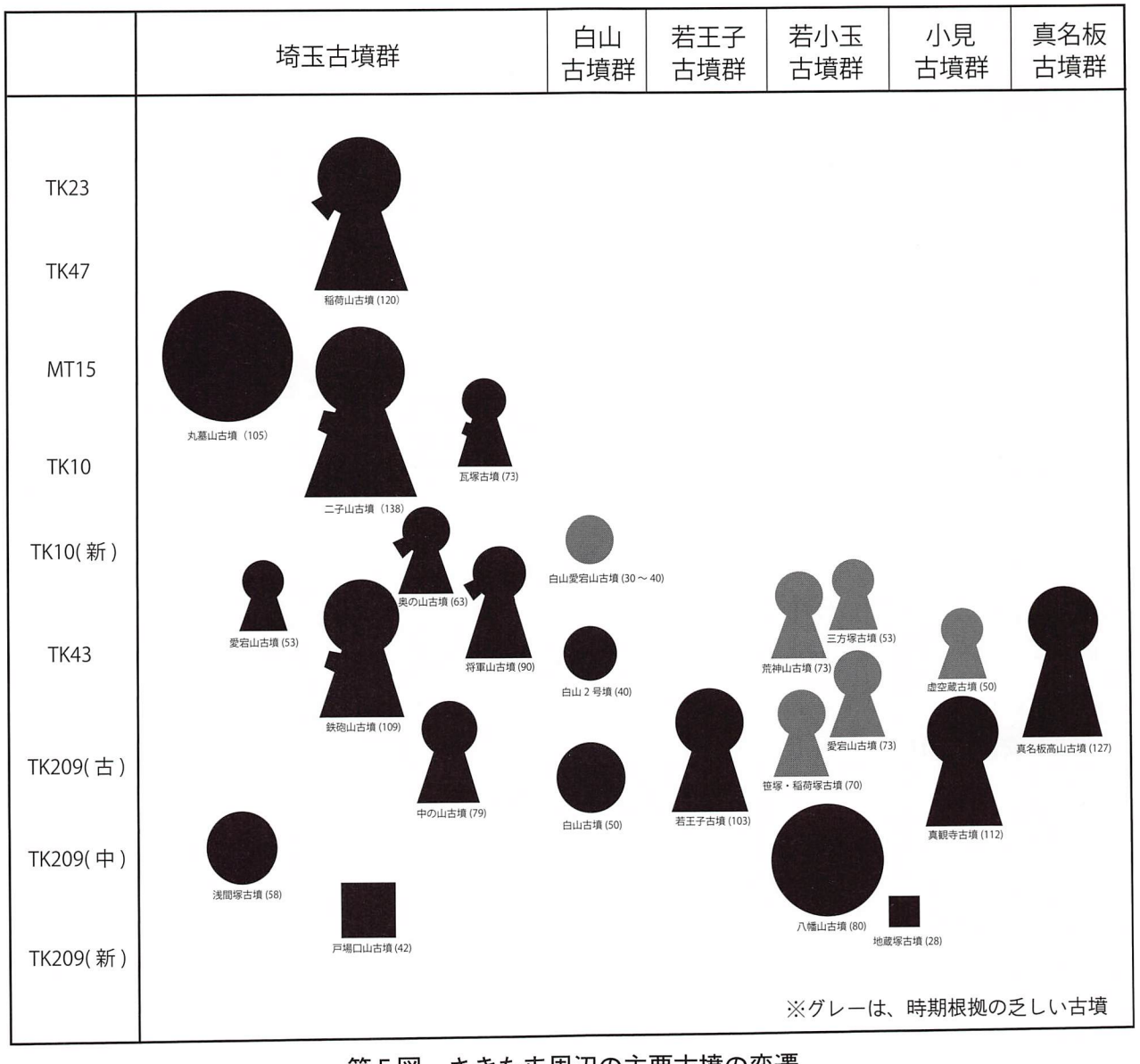
埼玉古墳群の北方約２㎞に位置する若小玉古墳群は、埼玉台地に隣接する独立支台上に形成された古墳群であり、複数の全長50mを超える大型の前方後円墳と円墳・方墳で構成されている。既に削平された古墳も多く、詳細な年代を押さえることは難しいが、この古墳群は６世紀中頃と推定されている全長58mの三方塚古墳の造営で始まり、その後、全長73mの愛宕山古墳、ほぼ同規模の荒神山古墳、前方後円墳と想定される笹塚・稲荷塚古墳と継続的に前方後円墳が造営された後に７世紀の初頭には大型円墳である径80mの八幡山古墳、続いて一辺27mの方墳の地蔵塚古墳が造営されたものと推定され、埼玉古墳群と同様に継続的に大型墳が造営された古墳群である[21]。若小玉古墳群は、かつては埼玉古墳群に後続する古墳群と評価された時期もあったが、むしろある時期から埼玉古墳群と平行して造営された古墳群とみるほうが正しい評

第４図　さきたま周辺の主要古墳

価であろう（太田2007）。

埼玉古墳群の北方約４㎞の地点に位置する小見古墳群は、星川右岸の自然堤防上に立地し、全長102mの小見真観寺古墳と全長50m程と推定される虚空蔵山古墳の２基の前方後円墳を中心として数基の小円墳が伴う小規模な古墳群である。小見真観寺古墳では２つの主体部が早くから開口し豊富な遺物が出土しており、その時期はTK209型式期段階に位置づけられる（新納1984）。なお、小見真観寺古墳には埴輪を伴うとする意見もあるが確認された埴輪は細片のようであり樹立の有無は明確ではない。虚空蔵山古墳はしっかりした突帯をもつ円筒埴輪を有することからTK43型式期段階に位置づけられよう。

埼玉古墳群の東方約１㎞に位置する若王子古墳群は、全長95mの前方後円墳である若王子古墳を中心に数基の小円墳で構成される古墳群である。主墳である若王子古墳は完全に削平されているが、2012年の確認調査で1930年に撮影された航空写真に写っている位置通りに古墳の跡が検出された[22]。若王子古墳は、既に削平されているため墳形企画などは不明であるが、出土



第5図　さきたま周辺の主要古墳の変遷

したとされる須恵器はTK209型式の古い段階に位置づけられるものである(杉崎1986)。この年代は部分的な確認調査ではあるもののこれまでの調査では埴輪が検出されていないことや、この古墳出土の伝承がある鉄地金銅張車輪文杏葉や鉄地金銅張雲珠といった馬具の年代観とも矛盾しない。

埼玉古墳群の東方約4㎞の地点に所在する真名板高山古墳も全長100mを超える前方後円墳である[23]。真名板高山古墳は埴輪の存在からTK43型式期に相当する(塚田他1997)。周囲に他の古墳が知られていない単独墳であるが、あるいは随伴する小円墳は埋没している可能性もある。

また、埼玉古墳群からやや離れた地点の大型前方後円墳としては久喜市栢間天王山塚古墳や羽生市永明寺古墳・同毘沙門山古墳などが存在する。

天王山塚古墳は、埼玉古墳群の南東12㎞ほどの地点に位置する全長107mの前方後円墳である。後円部径55m、前方部幅62mで埼玉古墳群中の鉄砲山古墳とほぼ同規模であるが、従来、天王山塚古墳のくびれ部は鉄砲山古墳よりも細いことから、鉄砲山古墳が大仙古墳型を取るのに

対し、別規格と考えられてきた(塚田他1997)。しかしながら、2012年に鉄砲山古墳の整備に伴う発掘調査を実施したところ、括れ部分が従来の想定以上に細くなることが確認された。このことから鉄砲山古墳と天王山塚古墳の墳丘は同規格となる可能性が大きい[24]。天王山塚古墳の墳丘からは円筒埴輪片が採取され、また主体部の石材と考えられる加工痕のある角閃石安山岩が墳頂に散在していることが確認されており同石材を使用した横穴式石室を主体部とするものであることが想定されている(若松1982)。時期はTK43型式の後半～TK209型式古段階頃の築造と推定される。

永明寺古墳は全長73mの前方後円墳で、1931年に礫槨から挂甲小札や馬具・鉄鏃・直刀などが出土している。関東造盆地運動等によって墳丘が若干埋没していることから、実際の墳丘規模はもう少し大きくなる可能性もある。出土した遺物は6世紀の中頃に位置づけられる[25]。毘沙門山古墳は全長63mで詳細は不明であるが工事の際に検出された埴輪から6世紀後半に位置づけられる(塩野2004)。

一方、前方後円墳ではないが、埼玉古墳群の近隣で比較的大型の円墳で構成された古墳群として白山古墳群があげられる。白山古墳群は、旧忍川を挟んで埼玉古墳群の対岸に立地し、直径30m～40mと推定される白山愛宕山古墳がTK10型式新段階頃、同じく直径40mの白山2号墳が最終末の円筒埴輪を有しTK43型式期～TK209型式古段階頃、直径50mの白山古墳は埴輪が無く角閃石安山岩の横穴式石室と推定されることからTK209型式期と推定され、6世紀の中頃から大型円墳を継続的に形成した古墳群である(中島他1994)。

以上整理すると、埼玉古墳群の周辺地域においても、埼玉古墳群内で前方後円墳の造営が増加する時期とほぼ同じ6世紀中頃を境として同時多発的に古墳が造営されていることが窺えるのである。特に若小玉古墳群では6世紀末頃までに少なくとも4基もの全長50mを超える前方後円墳が相次いで造営されている。また、さきたま周辺地域の古墳に共通するのは、6世紀前半には目立った大型古墳が存在しない地点に新たに造営を開始した古墳や古墳群であるということである。

こうした周辺状況から、6世紀中頃を境とする埼玉古墳群における前方後円墳の多出現象も単に古墳被葬者が連続して生じたために築造時期が重複したというような個別の事情によるものではなく、周辺地域と共鳴する社会現象ととらえるべきであろう。

V　埼玉古墳群の構造とその変容

埼玉古墳群の変遷について周辺地域を含めて改めて整理すると、

Ⅰ期－埼玉古墳群の墓域に大型墳が形成される時期。この古墳群で最初の大型墳である稲荷山古墳の周囲に小円墳が随伴する。その一方で埼玉古墳群の周辺には大型墳は基本的に造営されていない段階[27]。

Ⅱ期－埼玉古墳群の内部で、短い時間幅で規模に格差のある大型墳が連続して造営される時期。この墓域内からは小円墳は姿を消す。埼玉古墳群の周辺でも埼玉古墳群と同等規模の大型墳の造営が始まり、各地で古墳群が形成される段階。

Ⅲ期－埼玉古墳群内で前方後円墳の造営が停止し替わって大型円墳や方墳が造営されるように

なる時期。大型墳の数そのものも再び減少する。埼玉古墳群以外の地域では埼玉古墳群に隣接する白山古墳群と、その北側の若小玉古墳群のみの限られた範囲で大型円墳や方墳が造営され、それ以外のⅡ期に大型墳を造営した地域では大型墳が消滅する段階。

というようにおおまかに3期区分を設定することができる。

階層構成型といわれる規模の異なる前方後円墳の集合体として把握される埼玉古墳群も、その内部を窺うと時間の推移とともに激しく変動している様子が窺える。大型前方後円墳と小円墳が共存したⅠ期は少なくとも従属関係を示す階層性が存在すると考えられるが、小円墳には大型墳に随伴する小円墳と周囲の散在する小円墳とがあり、小円墳の被葬者も単純な構造ではない。

Ⅱ期になると従属的な位置にある小円墳はこの台地上から立ち退き、台地上は大型墳専用の墓域へと変わる。Ⅱ期の愛宕山古墳や奥の山古墳などの中型前方後円墳は、50mを超える規模を保ち[28]、いずれも方形二重周堀という他の古墳と同規格を採用し、立地においても極めて秩序立てられた築造規範に組み込まれて造営されており、同族集団としての強固な連帯感を窺わせる。こうした様相から見る限り、埼玉古墳群の中規模前方後円墳の出現は、他の有力者が埼玉古墳群内に組み込まれたとみるよりも、従来の埼玉古墳群を構成していた一族内部で何らかの理由によって、それまで前方後円墳を造営しない首長層の構成員が新たに古墳を造営するようになったことを想定するほうが適当であると考える[29]。

しかしながら、増田氏が示唆するようなⅠ期の小円墳に埋葬されていた被葬者層が成長してⅡ期の中規模の前方後円墳の被葬者となったとは考えづらい。なぜならば、一系列に造営された前方後円墳と、稲荷山古墳にのみ随伴し大型墳を遮蔽しないよう配慮して造営されている小円墳とでは当初から極めて異質であって、仮に同祖同族関係を意識した集団ではあっても、被葬者の性格は大きく異なっていたものと考えられるからである。

そこで、この時期に出現する中規模の前方後円墳の被葬者層は、前方後円墳に追葬されていたような同族層が新たに前方後円墳を造営するようになったものと考えておきたい。埼玉古墳群を見る限り、おそらく従来の首長一族の分離・独立という形で新たな古墳が造営されるという現象を生起させたものと推測する。

広瀬和雄氏は、複数系譜型古墳群という概念を「いくつかの地域に分散居住していた複数の首長が、共同墓域に結集して各々、数代にわたって古墳を造営しつづけた」と規定し、増田氏の見解を継承して、埼玉古墳群では6世紀中頃から階層的な上下関係をもった2系列が存在したと想定する[30](広瀬2012)。

しかしながら、埼玉古墳群に関する限り、初期の段階ではそうした複数の系譜の並存は認め難いし、6世紀中頃の大型墳の急増も、複数の系譜が数代にわたり並列したためではなく、突如として内部において古墳を造営する層が膨張したとしか思えない様相を呈している。しかもこれらの大型墳は、整然と埼玉古墳群の造営順列に従って一系列で造営され、排他的に強固な一体性を保持しているのであり、総体的にみてこの地に集まってきた複数の首長が並列的に数代にわたり古墳を造営しつづけたとは理解しにくいのである。

複数の首長が結集したという状況は、むしろ埼玉古墳群周辺の古墳群にこそあてはまる状況

のように思える。ただし、前稿で述べたように武蔵国内の過半数の大型墳が埼玉郡に所在し、しかもその多くが埼玉古墳群周辺地域の直径5kmの範囲に集積しているとしても、これを共同墓域という概念で括るにはあまりにも広範囲すぎるように思える。

筆者は、前稿において古墳の方位規制による埼玉古墳群の広域支配説を排除するとともに、古墳時代後期の大型墳がさきたま周辺地域に集中する現象について、この地域における農業生産力が他地域に比べ突出したためと考えるよりも、利根川の港湾施設等の物流の起点がこの地域に成立し、地域の政治・経済の拠点として高度に発達した結果、そこで多様化した政治・経済活動を担う首長が多く出現することになるとともに、河川流路や港湾施設等から眺望性を求めて、この地に古墳を造営したと考えた。このような状況は、地理的・地形的特性を求めて、緩やかにこの地に集合してきているというのがその実態ではなかろうか。

無論、そうした首長の中には、他地域から地域拠点であるこの地に進出してきたものも含まれるかもしれないが、少なくとも、埼玉古墳群では古墳群内部の分離により新たな古墳被葬者層が創出されたものと考える。

おわりに

埼玉古墳群は、同族集団としての強固な連帯感を示しつつも、各古墳の被葬者は個々に独自のネットワークを保有していたと思われ、また、古墳規模という点からみても周辺古墳群に対して相対的な優位性を保持していたとは到底思えない状況を示している。中規模前方後円墳の出現も周辺と同期する現象であり、埼玉古墳群が突出して階層化を顕現させた様相を読み取ることはできない。埼玉古墳群をこのように理解する限り、周辺地域の大型墳の造墓活動に規制を与えるような重層的な階層構造を有する「地域政権」の姿は、ここからは見えてこないのである。

しかし、この地域におけるこのような大型墳の多出現象は、6世紀後半に限られた一過性の現象であり、前方後円墳の築造停止時期の6世紀末～7世紀以降は若小玉古墳群を除けば大型墳が継続的に造営されることはない。前方後円墳の築造停止とともに大型墳は、埼玉古墳群・白山古墳群・若小玉古墳群という埼玉台地北端と隣接する万願台地から若小玉にかけてのより狭い範囲に再び収斂してしまうことになるのである。このような埼玉古墳群を含む周辺地域の古墳群の終焉の様相については別稿を用意している。

本稿は、平成22年12月6日に行った岡山大学創立60周年シンポジウム「巨大古墳の世界」の発表要旨が素地になっており、平成24年8月3日に行った第57回埼玉県文化財講習会で一部口頭発表している。

本稿を成すに当たっては、内山敏行氏に多くの御教示をいただいた。また県立さきたま史跡の博物館の学芸員諸氏との日常的な議論が極めて有益であった。記して感謝したい。

【註】

(1) 増田氏は、埼玉古墳群を「一世代一累系墳とすると(築造間隔が)あまりにも短すぎる」と述べており、まったく同感である。筆者も、この古墳群が一世代一累系墳であると主張しているわけではなく、また古墳の規模が生前の被葬者の力量を反映していることを否定しているわけでもない。全長130mを超える二子山古墳と全長53mの愛宕山古墳の被葬者の生前の力量が等質だったとは考えにくい。ただ、前稿においても述べたように二子山古墳よりも遥かに規模の小さい愛宕山古墳が二子山古墳の造営後に二子山古墳の西側に築造することを許容された背景には、少なくとも造墓活動において優先されるべき占地に前方後円墳間の規模の格差、つまり被葬者の力量が反映されるものではなかったことを示していると考えている。

(2) 近年、白山3号墳からは鬼高期古段階の土師器高坏の破片が出土しており、これが正しければ稲荷山古墳と同時期の小円墳が白山古墳群中にも存在することになる。

(3)「保渡田古墳群について、井出二子山古墳の周囲のみに小円墳があり、八幡塚古墳や薬師塚古墳の周囲には小円墳が存在しない。このことは、二子山古墳の被葬者は当地の開拓を主導した偉大な始祖であり、そのことが他の古墳と異なると考えた。そして偉大な始祖の奥津城である二子山古墳に隣接する位置に埋葬されることが、ある種の地位や社会的立場を明示することになったと考える」と述べて、始祖墓崇敬と小円墳との関係をとらえている。

(4) 古墳年代観の詳細は、関2012に触れたとおりである。ただし、二子山古墳は前稿ではTK47～MT15型式期古段階と幅をもたせていたが本稿ではMT15型式期に位置付けた。なお、二子山古墳は、135m、138m、139mなど報告により規模表記に違いがある。ここでは138mを採用した。今後の調査の進展によって、変更になる可能性もある。

(5) 2010年度奥の山古墳現地説明会資料に拠る。

(6) 埼玉将軍山古墳から出土した遺物の行方については、岡本1997に詳細に整理されている。

(7) 報告書では、石材の運搬中に取り落とした可能性が高いと推測しているが、取り落としたままにしておいたとは考えづらく、石室構築材の残りを遺棄したものではないであろうか。不要石材や加工石材の残骸を周堀等に残している事例は鉄砲山古墳においても確認されている。

(8) レーダー探査を実施した東北大学佐藤源之教授より御教示いただいた。

(9) 2011年度鉄砲山古墳現地説明会資料に拠る。

(10) 調査担当者であった塚田良道氏から御教示いただいた。

(11) 註11に同じ

(12) ここでは、群馬県東部地域～栃木県南西部～埼玉県北部の利根川流域を便宜的に利根川中流域と呼ぶこととする。

(13) 古海原前1号墳と埼玉稲荷山古墳の埋葬構造の共通性については既に橋本(2004)において指摘されている。

(14) 羽生市教育委員会の矢口氏の御好意により2011年に永明寺古墳の電探調査の際に実見した。

(15) このことから、この地域においては箱式石棺が相対的に上位の序列を構成していた可能性が窺える。ただし、稲荷山古墳の追葬では礫槨・粘土槨・木棺直葬が用いられており、大型墳が必ずしも箱式石棺に限定されているわけでない。上下に重複して追葬する場合に箱式石棺では構造的に設置しづらいという主体部構築上の問題があったのではないかと推測する。

(16) 坂本和俊氏は、一古墳において異なる複数の形態の主体部が構築される理由を、遠隔地で死去した一族構成員がその氏族の定められた墓域に運ばれて埋葬される帰葬の風習と関連づけて解釈しており、傾聴に値する見解である。追葬者の中には当然帰葬されたものも含まれるであろう。ただ、主体部の構造の違いは、やはり構築上の技術的な理由が大きいのではないかと考えている。

⑰　九条塚古墳はやや遡りTK10～MT85型式段階ではないかとする見解もある(小沢1989)。

⑱　内裏塚古墳群では姫塚古墳が全長4.5mの片袖式石室で唯一規模的には将軍山古墳に近似するが詳細は不明である。

⑲　無論、秩父産の緑泥片岩は稲荷山古墳以来、継続的に供給されていることから、石材供給に当たっても一元的なネットワークではなく複数のレベルのネットワークが介在したことが窺える。

⑳　利根川上流部の群馬県域とは対照的である。その理由はなお定かではないがおおよそ次のように想定している。群馬県域では、丘陵に隔てられた水系ごとに首長が所在し、同一水系内で奥行15km以上の政治圏内部で造墓地が移動していることが想定されている(若狭2007)。これは、水系が台地等で隔てられていて領域が細長い群馬県域の地理的特性によるものであり、地理的区分が明確化しやすい一方で、集約的な地域拠点が形成されにくいという事情が作用しているように思える。その一方、利根川中流域では平坦な地形上に複数の河川が錯綜して流下していることから、必然的に物流の拠点が形成され、集約化されやすい環境にあったと考える。そのため、各河川単位の首長たちは、水系ごとに割拠せずに河川が集約し交通網の要衝となった行田市周辺に墳墓を形成したのではないかと考える。

㉑　太田博之氏は笹塚・稲荷塚を1基の前方後円墳と推測しており、筆者もその見解に同意したい。

㉒　若王子古墳については現在確認調査が進行中であり、今後周堀の状況も判明することと思う。将来的に情報が整理された場合、白山古墳群や若王子古墳群、佐間古墳群を含めた広義の埼玉古墳群と現在指定となっている8基の前方後円墳と2基の大型円墳、1基の方墳を含む狭義の埼玉古墳群としてとらえる方が適切になるかもしれない。

㉓　測量では全長104mとされているが、墳丘自体が埋没しており、ボーリング等の結果による値では全長127mと推定されている。

㉔　平成23年度史跡鉄砲山古墳現地説明会資料による。

㉕　古墳から出土したとされる埴輪にB種ヨコハケが認められることから、古墳の年代自体を5世紀末～6世紀初頭まで引き上げる意見もある。ただ、全ての埴輪が古い様相を示めしているわけではないので、なお検討の余地がある。

㉖　交通の要衝に集積する大型墳の全ての被葬者を一定の領域支配者とはみなせないとする見解は、白石太一郎氏が既に提示しているものである。白石氏は、それらの被葬者の性格を「交通上の重要性からこの付近に数多く置かれたと推測される名代や子代などの部の地方管掌者としての性格をも持つもの」(白石1992)と把握されている。

㉗　とやま古墳は、既に煙滅してしまったが、全長69mと推定され稲荷山古墳に先行する古墳である可能性がある。

㉘　埼玉古墳群周辺のいわゆる群集墳のうち、前方後円墳を含む古墳群をみると、いずれも墳長が40m程度を最大とし50mを超えない規模の前方後円墳を盟主墳としている。たとえば、酒巻古墳群では、全長46mの前方後円墳である酒巻1号墳や全長27m超と推定される酒巻8号墳を中核として多数の円墳によって古墳群が形成されている。また生出塚古墳群では生出塚支群と新屋敷支群の2つの群で総数100基を超えると推定される古墳群が形成されているが、ここでも調査で判明した限り最大規模の古墳は全長42mの前方後円墳である新屋敷60号墳である(大谷1998)。騎西町種足古墳群においても主墳と目される小沼耕地1号墳は全長39mの規模にとどまっている。このように、これらの古墳は古墳群中の盟主墳ではあっても、50mを超える規模の前方後円墳は存在せずに、これまでにみた埼玉周辺の古墳が比較的規模の小さい前方後円墳においても50m超の規模の古墳を造営しており対照的な様相を示している。このような墳丘規模の格差からみても、群集墳を率いる階層の首長のうちの有力者がしだいに成長して、埼玉古墳群の中に組み込まれるようになったとは想像し難い。

(29) このような首長の並列的な状況は、文献に記載された「同族相争う」というような社会環境と整合的である。しかしながら、そのことをもって書紀の争乱の記述を6世紀後半代の埼玉古墳群に当てはめるつもりはない。

『日本書紀』安閑天皇の条に記された武蔵国造職を巡る同族争いの記事については、甘粕健氏が横浜市史に多摩川流域の古墳と埼玉古墳群の消長を対比させて以来、比企の古墳群と埼玉古墳群、あるいは埼玉古墳群内の古墳に対比させるなど多くの研究が見られ、最近では城倉氏によって整理されている(城倉2011c)。これらの短くない研究史の中で明らかにされたことは、書紀の記事を考古学的な事象に投影させようとすると複数の可能性が並列し特定の事象に合致させることは難しいという事実であろう。

最近の考古学の立場からは、古墳動向の変動が記事の虚実の前提となっているかのような一方的な議論も見受けるが(利根川2003)、文献に記された争乱が古墳動向に反映しているという保証は何もない。甘粕氏の所論は、文献と古墳動向の整合性を指摘したものであって、古墳動向の変動を前提とした立論ではないということは注意しておきたい。

(30) 白石氏は文献に現れる部などが、港湾の近くに多く設置されているという事実をもとに、古墳分布に偏在性が認められても、基本的には本貫地に古墳が造営されたということを前提にしており、本貫地を離れて首長が特定の墓域に結集してきたと考える広瀬氏の見解とは対照的である。

【引用・参考文献】

赤熊浩一・大谷　徹　2006　「古墳時代的須恵器窯の流通とその実態－末野窯跡－」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』　埼玉考古学会記念シンポジウム　埼玉考古　別冊9　埼玉考古学会

秋池　　武　2000　「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義－榛名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石－」『群馬県立歴史博物館紀要』　第21号　群馬県立歴史博物館

甘粕　　健　1970　「武蔵国造の反乱」『古代の日本　7　関東』(旧版)　角川書店

飯塚　卓二　1986　「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』　3　群馬県埋蔵文化財調査事業団

石塚久則他　1980　「塚廻り古墳群」　群馬県教育委員会

内山　敏行　2011　「中期後半から後期前半の下毛野」『古墳時代毛野の実情』　季刊考古学・別冊17　有山閣

内山　敏行　2012　「各地の古墳X　関東」『古墳時代研究の現状と課題(上)』　同成社

梅澤　重昭　1999　「綿貫観音山古墳の主体部横穴式石室と角閃石安山岩製截石削石積石室」　綿貫観音山古墳Ⅱ　石室・遺物編　群馬県教育委員会

太田　博之　2007　「武蔵北部の首長墓」『武蔵の相模の古墳』　季刊考古学・別冊15　雄山閣

大谷　徹他　1998　「新屋敷遺跡D区　大蔵省鴻巣宿舎建設工事関係埋蔵文化財調査報告」　埼玉県埋蔵文化財調査報告書　第194集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小川　良祐　2003　「埼玉稲荷山古墳の新情報」『ワカタケル大王とその時代－埼玉稲荷山古墳－』　山川出版社

尾崎喜左雄　1966　「第二章　榛名山二ツ岳の爆発とその前後期における横穴式石室の研究」『横穴式古墳の研究』吉川弘文館

小沢　　洋　1989　「千葉県における横穴式石室の受容」『第10回三県シンポジウム　東日本おける横穴式石室の受容』　第1分冊　千曲川水系古代文化研究所　北武蔵古代文化研究会　群馬県考古学研究所

門脇　伸一　1994　「白山古墳群」『酒巻21号墳(2次)白山愛宕山古墳(1・2次)白山2号墳』　行田市文化財調査報告書　第30集　行田市教育委員会　1994

加部　二生　1989　「群馬県東部における初期横穴式石室の様相」『第10回三県シンポジウム　東日本おける横穴式石室の受容』　第１分冊　千曲川水系古代文化研究所　北武蔵古代文化研究会　群馬県考古学研究所
栗島　義明　2011　「緑泥片岩を用いた横穴式石室の構築」『埼玉県立史跡の博物館紀要』　第５号　埼玉県立史跡の博物館
栗原文蔵・塩野　博　1969　「埼玉県羽生市永明寺古墳について」『上代文化』　第38輯　國學院大學考古学会
栗原文蔵・小林重義　1974　「行田市須加大稲荷古墳群について」『埼玉考古』　第12号　埼玉考古学会
栗原文蔵・斉藤国夫　1978　「大日種子板石塔婆および古墳の調査」　行田市文化財調査報告書　第４集　行田市教育委員会
小久保徹他　1985　「愛宕山古墳」　埼玉古墳群発掘調査報告書　第３集　埼玉県教育委員会
小林三郎・熊野正也　1976　「法皇塚古墳」市川市立市川考古博物館
小林　孝秀　2011　「上毛野・下毛野の横穴式石室－導入と地域色－」『古墳時代毛野の実情』　季刊考古学・別冊17　有山閣
駒宮　史朗　1989　「県内主要古墳の調査Ⅱ－戸場口山古墳範囲確認調査－」　調査研究紀要　第５号　埼玉県立さきたま資料館
斎藤　国夫　1987　「酒巻古墳群　昭和58年度～昭和60年度発掘調査報告書」　行田市文化財調査報告書　第18集　行田市教育委員会
斉藤　国夫　1994　「天祥寺裏古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』　行田市文化財調査報告書　第31集　行田市教育委員会
斉藤　忠他　1980　『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会
坂本　和俊　1996　「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬県考古学手帳』　6　群馬県土器観会
坂本　和俊　2004　「古墳時代の葬制をめぐって」『幸魂－増田逸朗氏追悼論文集』　北武蔵古代文化研究会
佐々木憲一編　2007　『関東の後期古墳群』　六一書房
佐藤　康二　2011　「平成22年度　埼玉古墳群周辺確認調査の報告－埼玉８・９・10号墳の確認調査－」『埼玉県立史跡の博物館紀要』　第６号　埼玉県立史跡の博物館
佐藤　源之　2010　「奥の山古墳の地中レーダー探査実験について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』　第４号　埼玉県立史跡の博物館
塩野　　博　2004　「埼玉の古墳　北埼玉・南埼玉・北葛飾」　さきたま出版会
城倉　正祥　2009　『埴輪生産と地域社会』　学生社
城倉　正祥　2011ａ　「北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群」　2008年度～2010年度科学研究費補助金　若手研究B研究成果報告『古代工房の復元的研究－埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に－』　奈良文化財研究所
城倉　正祥　2011ｂ　「埼玉古墳群の埴輪編年」『埼玉県立史跡の博物館紀要』　第５号　埼玉県立史跡の博物館
城倉　正祥　2011ｃ　「武蔵国造争乱－研究の現状と課題」　史観　第165冊　早稲田大学史学会
白井久美子　1983　「小規模古墳の一類型について－ブリッジ付き円墳の検討－」『古代』　75・76合併号　早稲田大学考古学会
白井久美子　2002　『古墳から見た列島東縁世界の形成』　千葉大学考古学研究叢書　2
白石太一郎　1985　「年代決定論」『岩波講座日本考古学』　Ⅰ　岩波書店
白石太一郎　1992　「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』　第44集　国立歴史民俗博物館

白石太一郎　2007 『東国古墳と古代史』 学生社
杉崎　茂樹　1986 「行田市若王子古墳について」『古代』 第82号　早稲田大学考古学会
杉崎茂樹他　1986 「瓦塚古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書　第４集　埼玉県教育委員会
杉崎茂樹他　1987 「二子山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書　第５集　埼玉県教育委員会
杉崎茂樹他　1988 「埼玉１～７号墳の調査」『丸墓山古墳　埼玉１～７号墳　将軍山古墳』 埼玉古墳群発掘調査報告書　第７集　埼玉県教育委員会
杉崎　茂樹　1989 「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』 第87号　早稲田大学考古学会
杉崎　茂樹　1991 「古墳時代の北武蔵における有力層の動態」『古代探叢』 Ⅲ　早稲田大学考古学会
杉崎　茂樹　1992 「北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第44号　国立歴史民俗博物館
関　義則・宮代栄一　1988 「県内出土古墳時代の馬具」 紀要　14　埼玉県立博物館
関　　義則　2012 「埼玉古墳群の構成原理」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第６号　埼玉県立史跡の博物館
高橋一夫・本間岳史　1994 「将軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』 29号　埼玉県史編さん室
滝沢　規朗　1992 「武蔵における首長墓の変遷」『東京考古』 10　東京考古談話会
滝瀬　芳之　1985 「愛宕通遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第51集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中　広明　1989 「緑泥片岩を運んだ道－変容する在地首長と労働差発権」『土曜考古』 第14号　土曜考古学会
田中　広明　1994 「『国造』の経済圏と流通」『古代東国の民衆と社会』古代王権と交流２
田中　広明　2005 「武蔵のミヤケ」『月刊考古学ジャーナル』 №533　ニューサイエンス社
谷口　　榮　1992 「柴又八幡神社古墳」葛飾区郷土と天文の博物館
塚田良道・中島洋一　1997 「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究報告』 第４集　行田市郷土博物館
塚田　良道　2002 「関東地方における後期古墳の特質」『古代学研究』 157
利根川章彦　2003 「「武蔵国造の乱」はあったか」調査研究紀要　第16号　埼玉県立さきたま史跡の博物館
中島　洋一　1991 「行田市内遺跡発掘調査報告書　佐間古墳群（２次）」 行田市文化財調査報告書　第24集　行田市教育委員会
中島洋一・門脇伸一　1994 「白山愛宕山古墳（１・２次）・白山２号墳」 行田市文化財調査報告書　第30集　行田市教育委員会
中島　洋一　2007 「白山３号墳発掘調査報告書」行田市文化財調査報告書　第38集　行田市教育委員会
永峰光一・大谷　猛　1987 「北区赤羽台古墳群」『東京都遺跡調査・研究発表会12』
新納　　泉　1984 「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』 創刊号　古墳文化研究会
仁藤　敦史　2007 「『辛亥』銘鉄剣と『武蔵国造の乱』」『武蔵と相模の古墳』 季刊考古学　別冊15　雄山閣
橋本博文・石関伸一　1984 「古海原前古墳群発掘調査概報」 大泉町教育委員会
橋本　博文　2004 「東国における埼玉稲荷山古墳の位置づけ」『ワカタケル大王とその時代』 山川出版社
土生田純之　2001 「後期古墳の研究」『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム三河大会実行委員会　三河古墳研究会　「古墳時代の政治と社会」所収
土生田純之　2008ａ 「国家形成と王陵－古代朝鮮と「東国」の事例から－」『国家形成の考古学』 現代の考古学７　朝倉書店
土生田純之　2008ｂ 「古墳時代の実像」『古墳時代の実像』 吉川弘文館

土生田純之　2010　「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』　第65集　九州古文化研究会
日高　　慎　2011　「毛野の影響圏としても北武蔵－埼玉古墳群を中心として－」『古墳時代毛野の実像』　季刊考古学　別冊17
広瀬　和雄　2012　「東京湾岸・「香取海」沿岸の前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』　第167集　国立歴史民俗博物館
増田　逸朗　1987　「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』　新人物往来社
増田　逸朗　1991　「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集－設立10周年記念論集』　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮田裕起江　1989　「総括、道明山古墳・筑波山古墳・舟山古墳について」『板倉町の遺跡と遺物』板倉町史・考古資料編　別巻９
若狭　　徹　2000　「人物埴輪の出現と受容―研究の回顧と上野の場合－」『大塚初重先生寿記念考古学論集』東京堂出版
若狭　　徹　2007　「古墳時代社会構造論」『古墳時代の水利社会研究』　学生社
若狭　　徹　2009　「史跡保渡田古墳群　井出二子山古墳　史跡整備報告書」　高崎市文化財調査報告書　第231集　高崎市教育委員会
若松　良一　1982　「菖蒲天王山塚古墳の造営時期と被葬者の性格について」『土曜考古』　第６号　土曜考古学研究会
若松良一他　1989　「奥の山古墳　瓦塚古墳　中の山古墳」　埼玉古墳群発掘調査報告書　第７集　埼玉県教育委員会
若松良一他　2007　「武蔵埼玉稲荷山古墳」　史跡埼玉古墳群　稲荷山古墳発掘調査・保存整備報告書　埼玉県教育委員会
和島誠一・甘粕　健　1958　「武蔵の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』　第１巻